

スイス現代美術展

# リアルワールド 現実世界

Talking about the Real World  
Contemporary Swiss Art



Topics

特集 スイス現代美術展 リアルワールドー現実世界  
千葉アートネットワーク・プロジェクト  
連載 ボランティア日和

## 美術とともに豊かな人生を



シャリヤー・ナシャット 隠蔽と探索 2005

私は日本の美術の歴史、とくに江戸時代の絵画史を専門に研究しています。江戸時代は、その終わりが140年ほど前、まだそれほどの昔ではありませんので、今まで隠れていた名品がふと発見されたりして、研究者にとっては大変刺激的で、興味深い時代です。

ところが、西洋の美術に親しむことに慣れた人から、よく尋ねられるのです。いつ、どうしたことがきっかけで、そのような日本の古い美術などに興味を持つようになったのですか、と。現代ではそれほどまでに我が国の伝統的な美術や文化が、一般の方々にとって無縁に近い存在になってしまったのでしょうか。若いときからじじむさい趣味を持っていたのかといわんばかりの、からかい半分の口調を感じさせられるのです。

実際、美術館では古い屏風や掛軸、画卷などを貴重な美術品として陳列ケースに飾っていますが、それらがどのように飾られ、鑑賞されていたかを知る人は、今や少なくなってしまいました。自宅に床の間が無いのは当たり前で、洋間ばかりで畳の上に乗ることすら滅多にないといった若者が増えているのです。

最近では大学で学生に日本美術史を講義するとき、分かっているはずとの思いこみをなるべく捨てるようにしています。この人たちは、外国の人と同じ程度の知識と感覚の持ち主なのだから、何から何まで詳しく説明してあげなければならない、そうすれば心の片隅に残っている感受性のDNAがうごめきだして反応してくれるのではないかと様子をつかってみるのです。美しいスライドや画集で優れた作品を紹介し、展覧会に誘って本物に接する機会を提供するなど、様々に試みると果たして彼ら、彼女らは、それまで知らなかった日本の美術に驚き、魅せられ、新しい経験を喜んでくれるのです。

美術館ではどうでしょうか。同じような世代、あるいはもっ

と世代が下がる高校生以下の生徒たちに、あまりにも不親切だったのではないのでしょうか。努力を惜しんできたのではないのでしょうか。

板橋区立美術館館長の安村敏信さんは、私よりも敬愛する美術館人の一人ですが、少し前に『美術館商売』（勉誠出版）という魅力的な本を出版されました。その本の表紙には、「美術館の常識は非常識！従来の美術館の姿勢を自己反省し、無関心層をも取り込む新しい美術館像を模索する」という、安村さんの危機感と問題意識とが表明されています。そこに示された提言の内容に共感するところが多く、千葉市美術館のミュージアム・ショップにも置いてもらっていますので、ご関心のある方は是非同書をご一読ください。

また、どなたの弁であるかを忘れてしまいましたが、あの第二次世界大戦のさなか、おなかをすかせながらも画集をひもとき、あるいは好きな絵を描いてつくづく、「美術のない心の渇いた人生なんて」と思ったということです。

まことに同感です。そして、その愛する美術の幅を広くすることは、人生をより豊かにさせてくれるはずで、日本の古い美術はもとよりのこと、世界の新しい美術にも目や心を開いていただきたいものです。本館でいま『スイス現代美術展 リアルワールド - 現実世界』という展覧会を開催中です。6人5組のアーティストによる作品(1点は2人による作品)のうち、どなたもどれかに心を惹かれることでしょう。私たちもアーティストたちと同じ現代を生きているのですから、どこかで共感、共鳴できるはずで、

皆様にとってこの年がますます美術に親しむことのできる一年となりますよう、そして心豊かで幸多い年となりますよう、年頭に当たってお祈り申し上げる次第です。

館長 小林忠

## 「リアルワールド - 現実世界」 - 最先端のスイス美術をどのように見るか

現代美術というと一般に馴染みにくいものと思われがちですが、1990年代末頃から、難解さを退けた、比較的親しみやすい作品が世界的に増えてきました。この傾向はスイスの美術においても顕著に見られます。半田滋男氏は本展の図録のなかで、「我々日本から現代スイスのアーティストについて語る際に瞠目させられるのは、その選択するメディアに係わらぬ視覚的な明快さである」とこの傾向を評しています。「多義的な解釈が可能であることがハイアートの本質である」と考える傾向が強い日本の現代美術に比べて、スイスの現代美術には、明快な視覚性とコンセプトを備えた作品が多いという印象を受けます。

「リアルワールド-現実世界」の出品作品の多くも、この明快さを備えています。ストライプ模様の視覚的イリュージョンに遊び心を加味したシルヴィー・フルーリの《ストライプとハイヒールのサウンド》(2005)や、浜辺をさまよう孤独な男女の姿を165枚の写真で捉えたウーゴ・ロンディノーネの《スリーブ》(1999)などの場合は、現代美術に詳しくない方でも、作品の意味を直観的に理解することができると思います。またこの明快さは、よりコンセプチュアル(観念的)なアーティストであるシャリヤー・ナシャットやファブリス・シージの作品にも見られます。ナシャットの作品は、ビデオ・アートでありながら視覚的にも構成的にも極めて単純明快であり、シージの《エアバッグ》(1997)や《胸郭》(2004)も、作品の背後にある毒を含んだメッセージとは裏腹に、どこかユーモラスな形態を持ちます。

一方でこれらの作品は、明快な視覚性の裏側にそれぞれ固有のテーマを隠しています。個々のアーティストたちは、現実世



シルヴィー・フルーリ ストライプのウォールペインティングとハイヒールのサウンド 2005

界(リアルワールド)の中に独自のテーマを求め、大胆な作品へと変容させていったのです。出品作品をより深く理解するためには、それらを理解することが欠かせません。それらのテーマは、スイス社会の諸相を覗かせると同時に、先進国共通の問題を数多く含んでいるため、私たち日本人とも決して無縁ではないのです。

例えばフルーリは、消費文化がもつうわべの美しさを極端に誇張して作品に引用します。《エンジンとフレームのウォールペインティング》(1999)では、ホットロッド・カーのボディに描かれる炎模様のパターンを展示室の壁に拡大して描き、クロームメッキを施した専用エンジンのブロンズキャストをその前に並べました。ガソリンを大量に消費しながら、信じられないスピードで加速するホットロッド・カーは、まさに消費文化が持つ贅沢さと浪費性を象徴しています。この作品が消費社会の華麗な側面を反映するのか、あるいは否定的な側面をグロテスクに反映するのかの判断は、この作品を見ているあなた自身に委ねられているのです。

昨年(2004)の第51回ヴェネツィア・ビエンナーレのスイス代表に選ばれたシャリヤー・ナシャットは、イラン系移民としての視点から、抑圧者と被抑圧者の関係をテーマにしたビデオ作品を作り続けてきました。ビエンナーレの出品作でもある《規制する線》(2005)は、ルーベンスの《マリー・ド・メディシスの生涯》の間を舞台に撮影された作品です。広大なルーブル美術館の中でも最も華麗で、なおかつ最もあからさまに権力を表象する西洋美術史上の傑作を前にして、非西洋系と思われる若い男は、自らの肉体だけを使って作品と向き合います。片手で逆立ちをするこの男の視線から、ルーベンスの絵画はどのように見えるのでしょうか。

消費文化のもつ光と影を誇張して再提示するフルーリ、移民



シャリヤー・ナシャット 《規制する線》 2005

の視点から西洋文化と対峙するナシヤットをはじめ、個々の出品作家たちは、それぞれ現実世界(リアルワールド)に存在する具体的、個別的なテーマを扱っています。したがって個々のテーマについての予備知識がないと、作品を完全に理解することは困難となります。作品を鑑賞する上でこのような予備知識を必要とすることも、日本画や洋画、19世紀の西洋絵画と比べて、現代美術が難解とされる理由のひとつなのです。

今回の展覧会は手の込んだ大型の作品が数多く出品されて、美術館の全展示室を使っているにもかかわらず、出品点数は13点にすぎません。これは各アーティストの代表作がこの展覧会に出品されているからですが、それだけでなくスイスの中堅・若手アーティストたちが恵まれた環境に置かれていることの反映でもあります。実際スイスには、大型のインスタレーションを制作したり、映画並みのスタッフと機材で大掛かりなビデオ作品を撮影する若いアーティストが少なからず存在します。例えば5×7×3.5mという巨大な舞台セットを含むモゼール&シュヴィンガーの《抑留区域》(2002)は、二人がサンパウロ・ピエンナーレのスイス代表に選ばれる2年前に制作された作品です。当時まだアートの世界でのキャリアが6年程にすぎず、数回しか個展を開いた経験のない若手作家が、このような大規模な作品を作ることが可能な環境がスイスにはあるのです。ファブリス・シージも、スイスはアーティストにとって活動しやすい場所だと語っています。

スイスの若いアーティストたちが置かれた環境は、ある意味日本とは好対照をなしているように思われます。日本では、多くの若手作家が作品発表の場として貸画廊に依存しており、制作費のかかる大規模なビデオ作品や大型のインスタレーションを制作できるアーティストは限られているからです。けれども日本の若手・中堅のなかには、作品の制作費や発表場所が限られている中でも、新しい形態の作品を生み出そうと試みる者もいます。例えば今年度のWi-CANプロジェクトで朝岡あかねさんが千葉大学の学生らとともに行った《噂としてのUFO》のような作品は、このような環境を前向きに考えることにより生み出された作品と言えるでしょう。逆に現在のスイスでは、この作品のようなプロジェクト形式の試みはあまり見られません。このように、経済的・社会的な環境が美術作品の形態に影響を与えるという現象が現代でも見られることは、非常に興味深い事実と言えます。このような環境の違いが地域ごとに個性的な作品を登場させ、情報化時代といわれる現代においてさえ、地域的な差異と多様性を生み出しているのです。

学芸員 水沼啓和

## スイス現代美術展 リアルワールド - 現実世界

2005年(平成17)12月17日(土) - 2006年(平成18)2月26日(日)

10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで

\* 入館受付は閉館の30分前まで

【休館日】毎週月曜日

【入館料】一 般 800(640)円

高・大学生 560(450)円

小・中学生 240(200)円

\* ( )内は団体30人以上の料金



ウーゴ・ロンディノーネ スリープ 1999



モゼール&シュヴィンガー 抑留区域 2002



ファブリス・シージ 胸郭 2004

## スイス現代美術展関連イベント

### | コンサート |

#### 「現代スイス・音の風景」

日 時 | 2月12日 [日] 午後2時より

会 場 | 美術館11階講堂

出 演 | 河村典子(ヴァイオリン、スイス在住)、  
白土文雄(コントラバス、スイス在住)、中根康美(ギター)

演 目 | ルドルフ・ケルターボルン作曲

「三つのメタモルフォーゼ」ほか

\* 入場無料 先着順に120名まで受付

チューリッヒを拠点に活動する日本人ヴァイオリニスト河村典子を中心に、  
ギター、コントラバスを加えたトリオによるスイス現代音楽のコンサート。

### | ヴィデオアート上映会 |

#### 「スイス・ビデオランドスケープ・トゥデイ」

日 時 | 1月22日 [日] 2月19日 [日]

午後2時より

会 場 | 美術館11階講堂

上映作品 | ビピロッティ・リスト「わたしはこの歌の犠牲者」  
ほか11作家13作品(計70分)

\* 入場無料 先着順に150人まで受付

スイス人アーティストによるシングルチャンネル・ビデオ作品の上映会。  
2回とも同内容です。

### [ 無料往復バス ]

千葉市美術館と「ゲルハルト・リヒター」展開催中の川村記念美術館との  
あいだに、無料往復バスを走らせます。

運行日 | 1月21日 [土] 1月22日 [日]

(1月22日はゲルハルト・リヒター展最終日です。)

時 間 | 川村 千葉 11:00, 14:00, 16:00発

千葉 川村 12:00, 15:00発

\* 所要時間は約50分。千葉市美術館エントランス前、川村記念美術館無料  
送迎バスのりばから発着。

## 市民美術講座のお知らせ

千葉市が今まで収集した美術品は、企画展や所蔵作品展でテーマを決めて公開していますが、収集された美術品が美術史の中でどのように位置付けられるのか知りたいという声が多く寄せられております。

そこで、昨年度より千葉市美術館のコレクションを理解していただくための市民美術講座を開催しております。2006年1月～3月は、房総ゆかりの作家・作品を中心に講座を行っています。

第2回 2月25日 [土] 「千葉ゆかりの日本画家・石井林響」

講 師 | 浅野秀剛(本館学芸課長)

第3回 3月18日 [土] 「椿貞雄の周辺」

講 師 | 藁科英也(本館学芸員)

時 間 | 午後2時より

会 場 | 美術館11階講堂

\* 入場無料

## ボランティア日和 episode 9

スイス展の鑑賞にやってきた小学生たちと、いざ展示室に踏み込んだ一條リーダー。びっくりするような仕掛けばかりが待ち受けている会場で、作品のおもしろさを、子どもたちと一緒に見つけたようです。

近年、ギャラリートークを行う美術館が増えてきました。学芸員による解説、ボランティアによるツアーガイドなどその方法は様々ですが、一人でみるのとはまた違った視点で、作品と向かい合うことができるのが良いところではないでしょうか。千葉市美術館ではボランティアスタッフが企画展のギャラリートークを担当しています。展覧会の内容も企画展はもちろん古今東西問わず、千葉市美術館所蔵品展では浮世絵や現代美術まで多種多様。次々と開催される展覧会の度、美術史の本を広げ、担当学芸員のレクチャーを聴講し、図書館で作家について調べと結構な時間と労力が必要です。

いよいよギャラリートーク本番となると、今まで勉強してきたことを基本に、その時のお客様の状況に合わせて、トークをする内容をアレンジ・・・なんてできればカッコイイのですが、実際は美術用語を度忘れしたり、話そうと思っていたエピソードを飛ばしたりとなかなか思ったとおりには進みません。それでも最後までお付き合いくださったお客様から拍手などいただけた時はほっとして、次回もまたがんばろう！という気持ち

ちになるのです。

もともと美術をみるのは好きでしたが、ひとつの展覧会の趣旨や展示の流れを理解し、そのうえで一つ一つの作品をじっくりみて考え、それを人に伝えるという機会を得ることができたことは、美術館ボランティアという活動を通して得られた貴重な生涯学習の場であると感謝しています。

現代美術の展覧会では「来てはみたものなんだかよくわからない作品ばかり」そんな感想をもつお客様もきっと多くいらっしゃると思います。私達ボランティアスタッフも実は同じなのです。それでも作品を前にわからないなりに感じたこと、少しは勉強したことをギャラリートークでご紹介し、皆様とコミュニケーションをとることができればと思っています。是非一緒に、美術館を楽しみましょう！！

美術館ボランティア 一條直美

\* スイス現代美術展のギャラリートークは不定期に行われています。  
美術館までお問い合わせください。

# 千葉アートネットワーク・プロジェクト2005「となり×となり」

3年目を迎えた「千葉アートネットワーク(通称Wi-CAN)・プロジェクト」。今年度は、栄町、里山、佐倉の3つの地域と、それらの点をつなぎ、プロジェクト全体の拠点となるアートセンター、あわせて4つの班にわかれて動きました。各地域の核となる施設や組織と千葉大学の学生(教育学部芸術学研究室ほか)の協働により、まちの特色をいかし、それぞれの地域固有の課題をにらみながら、アーティストを招いたワークショップやイベントを展開してきました。

市美術館を含む「栄町班」の企画は、現代美術家の朝岡あかねさんを迎えた「噂としてのUFO 2005」。中心的な舞台となる栄町(千葉市中央区)は、古くからの商店街でありながら、異なる文化、言語、時間の流れが不思議なバランスで存在する街です。アートセンターを含む地域ということもあり、その2階をすてきな展示空間にしようということになりました。



「噂としてのUFO」 ©朝岡あかね 2005年

## 「噂としてのUFO 2005」

朝岡さんによる一連の写真作品「噂としてのUFO」は、アメリカで同時多発テロのあった翌年、2002年にヒューストンで初めて制作されています。タイトルは、心理学者ユングの著書『空飛ぶ円盤』(原著1958年)の第一章に由来しており、不安定な社会情勢の中で人々の不安や恐れが空に投影され、彼らにUFOを見させたという、「集合的無意識」という考え方にインスピレーションを受けた作品です。

今回、栄町班のメンバーと顔合わせをし、まちあるきをした結果、千葉を舞台に、より大きな展開を見せることとなりました。栄町とUFOとは、いかに？

## 噂の特別捜査本部、発足

さっそく、「噂の特別捜査本部」をつくり、プロジェクト開始。朝岡さんをリーダーに、「係長」以下、コードネームを持つ学生たちが動き始めました。彼ら捜査員が集めるのは、千葉の噂、最近の怖い噂、そしてUFOの目撃情報です。

「噂としてのUFO」の柱となるのは、写真作品の展示です。11月中旬に4日間と半日をかけて、市内各地でロケを行いました。朝岡さんと学生メンバーからなるロケ隊が出没したのは、栄町、美術館周辺、亥鼻、西千葉(千葉大)、少し離れて、検見川など。行く先々で、たくさんの方にご協力いただきました。お仕事中にUFOを見つけていただいた方、あまり事情を飲み込めないながらも、おもしろがって、一斉に遠くを見上げてくれた図書館前の学生さんたち。数々の出会い、街角の名演技は、NGシーンとともにメイキングビデオにおさめられ、大型写真4点とあわせて、アートセンター<Wi-CANP>にて公開されました。



Wi-CANP 2階の展示風景

また、展示のオープニングにあわせて、トークイベントも。「UFOを目撃するとはどういうことか(どういう現象か)?」ゲストを迎えてのディスカッションに、会場は大いに盛り上がりました。この日は、「宇宙人琴奏者」日原史絵さんのすてきなパフォーマンスもありました。

## プラネタリウム ジャック

関連企画として、千葉市立郷土博物館の協力を得てプラネタリウムをお借りし、「プラネタリウム ジャック」を行ないました。これは、噂の特別捜査本部にナゾの挑戦状が届いたという設定で始まるもの。

プラネタリウムを守るべく、駆けつけた捜査員たちを待っていたのは、満天の冬の星空と、美しく幻想的な琴の音。解説員の方のお話をうかがい、うっとり星空を眺めていた参加者の視界を突然横切ったのは・・・まさか・・・。



「プラネタリウム ジャック」リハーサル風景

## 噂新聞

展示の初日と最終日にあわせて、「噂新聞」なるものが発行され、配られました。とてもよくできた新聞で、このプロジェクトの進み具合と関連イベントなどの情報を伝える役割を果たしつつ、読み物としてのおもしろさで読者の目と心をつかんだはずで

す。また、「噂」の提供というかたちでプロジェクトに参加してくださる方を募集しました。インターネットを利用した「噂掲示板」は、噂の投稿と閲覧を目的としたものです。美術館のエントランスにも、ご来館のお客様をお迎えする無人の机があります。机の上には、謎の調書とえんぴつ、回収箱が置かれています。じつはこれ、「噂の特別捜査本部」の美術館支部なのです。

写真作品の展示は12月で終わりましたが、噂の特別捜査本部の活動は、3月まで続きます。今までに集まった噂の山を前に、捜査員たちがどのような動きを見せるのか、今後の展開に、乞うご期待！

## 他のサイトものぞいてみましょう

里山では、磯崎道佳さん(現代美術家)を招いて、不思議な巨大ドームをつくりました。中から見上げると、ビニールに貼られた色とりどりのヒト型がにぎやかに揺れ動きます。これらは、様々な人たちに協力していただき、型取りしたものです。

ダンサーの山田うんさんを迎えてのワークショップも、昨年から引き続き行なっています。障がいをもつ人とともに参加するダンスワークショップ「みんなで踊ればこわくない」は、参加者からの反響が大きく、この地域で育ってきたプログラムとして、今後に楽しみです。

また、佐倉市立美術館の教育普及事業として行なわれた佐倉班の企画「坂道時間」は、味わい深い坂のまち、佐倉ならではのもの。アニメーション作家の布山タルトさんを迎えて、コマ撮りアニメーションで、それぞれの坂のマスコットキャラクターをつくるワークショップをしました。坂の長さの毛糸でマフラーを編む、という企画もなかなかすてきでした。



「みんなでドーム in 大観池」

## アートセンター

千葉駅東口から徒歩10分ほどの距離にある栄町通り商店街の中につくられたアートセンター。商店街の方たちをはじめ、様々な応援を受けながら、学生たちが運営してきました。ここでは、アート関係の情報を発信し、ワークショップやシンポジウムなどの自主企画を行なう場でありながら、栄町、里山、佐倉の企画が反映される場でもあります。

最近では、お兄さんやお姉さんが「店番」をしていると、近所の子どもたちが遊びに来てくれるようになりました。ここでは、月1回程度のペースで、「駄菓子屋 コスゲ商店」というこども向けのイベントも行なわれています。



アートセンターWi-CANP 外観

地域連携事業であるWi-CANプロジェクトには、美術館だけでなく、教育や福祉、まちづくりなど、様々な視点が持ち込まれています。それら異なるものを、「アート」を媒介として、学生のもつ柔軟な発想とエネルギーでつないでゆき、ゆるやかな、より大きなネットワークの実現をめざしています。「アート」には、ひとつ、固まってしまった日常の「関係」の中では疑おうともしなくなっていた障壁や違いを、飛び越える力があります。少なくとも(このプロジェクトに関わってきた者の目には)、なにがしかの「人を引っ張り出す力」があるように思われるのです。地域コミュニティにとっては、このプロジェクトによって持ち込まれるアート(およびアーティスト)も、学生も、「よそからやってきたもの」であり、未知なもの、異質なものへの期待と不安の入り交じったまなざしが注がれる対象といえるでしょう。彼らとは対照的に地域の中で活動してきた施設や組織との掛け合いによって発せられる火花が、小さくても、消えない炎に育ってゆけばと思っています。

学芸員 山根佳奈

Wi-CANプロジェクトは、まだまだ進行中。アートセンターも、3月までオープンしています。詳細は、千葉アートネットワーク・プロジェクト実行委員会のホームページ<http://www.wican.org/2005/top/topics.cgi>をご覧ください。

# 「戦後日本デザインの軌跡 1953-2005 - 千葉からの挑戦」

現在私たちが「日本の美術」と呼んでいるもの、とりわけ近世以前に生みだされたものの多くはかつて生活の飾りであり、暮らしの意匠でした。衣服や調度の制作が手技から機械に替わり、その形や色が「デザイン」と称されるようになって、日本人はもの作りに洗練された美意識を発揮し、その仕事ぶりは世界的に高い評価を受けています。

この展覧会は、千葉大学工学部工業意匠学科の出身者たちによるデザインを集めたものです。千葉大学工学部は1921年に創設された東京高等工芸学校を前身とし、その伝統のもと全国的にもきわめて早い時期からデザイン教育に着手しました。そして戦後の経済復興期から高度成長期にかけて、家電やインテリア、広告など幅広い分野に優れたデザイナーたちを送りだして来ました。展示内容は自動車やカメラ、公共サインや化粧品パッケージなど約300点。1950年代から現在までの各時代を象徴する、懐かしくも新しいカタチの数々をご覧くださいと思います。

学芸員 西山純子



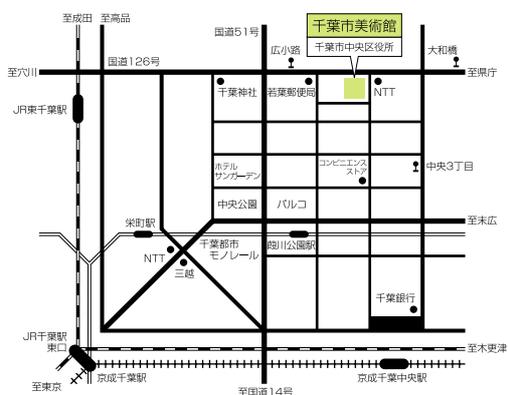
トランジスタラジオTR-610  
東京通信工業(ソニー) 1958年



ハイクラウンチョコレートパッケージ 森永製菓 1965年



デジタルウォッチ05LC 第二精工舎 1973年



 **千葉市美術館**  
Chiba City Museum of Art

JR千葉駅東口より徒歩約15分 / 千葉都市モノレール県庁前方面行「葭川公園駅」下車徒歩5分 / バスのりば7より大学病院行、南矢作行にて「中央3丁目」下車徒歩2分 / JR千葉駅へは東京駅地下ホームから総武線快速千葉方面行で約42分

京成千葉中央駅東口より徒歩約10分

東京方面から車では京葉道路・東関東自動車道で宮野木ジャンクションから木更津方面へ貝塚ICで出て国道51号を千葉市街方面へ約3km 広小路交差点近く地下に駐車場有り

【編集・発行】千葉市美術館 〒260-8733 千葉市中央区中央3-10-8  
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316  
Chiba City Museum of Art  
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733 Japan

【発行日】2006年1月20日

【印刷】株式会社プリンテックメディア